

中 小 企 業 論

〔新 版〕

有斐閣双書

中 小 企 業 論

藤 田 敬 三 編
竹 内 正 巳

有斐閣双書

＊入門・基礎知識編＊

編者紹介

藤田敬三	1921年	京都大学経済学部卒業
	現在	大阪経済大学教授
竹内正巳	1929年	京都大学経済学部卒業
		前桃山学院大学教授

有斐閣双書

中小企業論〔新版〕

昭和43年2月25日	初版第1刷発行
昭和47年4月25日	新版第1刷発行
昭和52年1月30日	新版第10刷発行

編者

藤田敬三
竹内正巳

発行者

江草忠允

東京都千代田区神田神保町2～17

発行所 株式会社 有斐閣

電話 東京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷・株式会社天理時報社 製本・高橋製本所

©1972, 藤田敬三・竹内正巳, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価は外函に表示してあります

執筆者紹介

〔執筆分担〕

ふじ 藤	た 田	けい 敬	ぞう 三	(大阪経済大学教授)	〔1〕
たか 高	しろ 城	ひろし 寛	(大阪経済大学助教授)	〔1〕	
なか 中	むら 村	つとむ 精	(南山大学教授)	〔2〕	
たつみ 異	のぶ 信	はる 晴	(大阪市立大学助教授)	〔3〕	
やま 山	もと 本	じゅん 順	いち 一	(大阪府商工経済研究所長)	〔4〕
み 三	やけ 宅	じゅん 順	いち 一郎	(奈良県立短期大学教授)	〔5〕
た 田	なか 中	みつる 充	(関西大学教授)	〔6〕	
ま 間	お 学	たに 谷	つとむ 努	(京都産業大学教授)	〔7〕
あき 秋	もと 本	いく 育	お 夫	(立命館大学教授)	〔8〕
なか 中	ごみ 込	たけ 武	お 雄	(愛知県経済研究所所長)	〔9〕
うえ 上	だ 田	たつ 達	ぞう 三	(関西大学教授)	〔10〕
しょう 庄	や 谷	くに 邦	ゆき 幸	(桃山学院大学教授)	〔11〕
たけ 竹	うち 内	まさ 正	み 巳	(前桃山学院大学教授)	〔12〕
おく 奥	むら 村	さかえ 栄	(愛知学院大学教授)	〔12〕	

は し が き

中小企業は、古くから存在している問題をかかえながら、たえず新しい問題に当面し、それへの適応をせまられている。旧版『中小企業論』（1968年2月）刊行後における中小企業をとりまく内外環境の変化は真に著しいものがあり、それへの適応性をもたない古い型の中小企業はその基盤を失って消えていきつつあるのに対して、適応性をもつ新しい型の中小企業为数多く育ってきた。しかしそれらが安定成長をとげるための主体的・客体的条件が育ってきたのかどうかということについての評価はまちまちである。それは古くから存在し続けている問題が依然としてその背後にのこされているからである。

そこで本書では、旧版の構成を踏襲しながらも、上述の問題にもこたえることを1つのねらいとして、旧版の全面改訂を行なったものであるが、もともと学生向きの講義用テキストや参考書としての使用を考慮して共同執筆されたものであるから、上述のねらいは執筆者の意識のなかにはあっても、そこに焦点をおいて執筆されたものではない。むしろ一般性のなかで日本の特殊性を理解しながら、構造変化と新しい発展方向をさぐり、現在の政策の位置づけを解明することをねらいとして執筆されたものであるといえる。

全体は12章からなっているが、1～3章は、いわば総論ともいえるべき部分で、中小企業問題発現の歴史的過程、国民経済における中小企業の役割を欧米との比較を加えて一般性のなかで日本の中小企業問題の特殊性を明らかにした後、その存立条件、形態、分野の分析を通じて、従属

形態としての中小企業ことに下請制の本質とその発展方向の究明がなされている。

4～5章は、中小企業経営の特色をその経営者ならびに資本と収益性、労働力構成、労働条件、労使関係を通じて明らかにしたものである。6～9章は再編過程の中小企業ともいうべき内容をもつもので、環境変化の著しかった旧版以後の構造変化を地域産業という視点から、或いは技術革新との関係において、或いはまた流通革新との関係においてとらえながら、全体としての産業再編と関連させて中小企業の新たな発展方向をさぐろうとしたものであり、新しい型の中小企業の評価にも言及されている。

10～12章は、中小企業政策との関係で問題がとりあげられたものであるが、重要な政策課題としての組織化、協業化、集団化問題を中心に検討した後、中小企業政策の展開を歴史的に跡づけながらその変遷をみ、旧版後重視されだした構造改善政策ならびに、環境変化への適応政策の在り方が問題とされている。

本書は既述のように学生向き教科書・参考書として編集されているが、中小企業問題に対して関心をもたれる一般の方々のご要求にも十分こたえうるものと思う。また本書の刊行にあたって、いろいろご苦勞を煩わした有斐閣の岡村孝雄氏に対し深謝の意を表する。

1972年2月

編 者

目 次

は し が き

1 資本主義の発展と中小企業	1
1 資本主義と中小企業問題	1
A 中小企業問題の把握のために	1
B 中小企業の問題性と資本主義の「矛盾」	2
2 資本主義発展と中小企業問題の展開	3
A 産業資本主義段階と「小工業問題」	3
B 独占資本と「中小企業」問題	5
C 中小企業問題の発現形態	7
3 日本における中小企業問題の展開	10
A 日本的「矛盾」と「問題」性の規定	10
B 「在来産業」の問題	11
C 「小工業」問題	12
D 日本的「中小企業」の失軀形態	14
E 中小企業「問題」の発生	15
F 「重要位置」として認識された中小企業	16
G 中小企業問題と産業構造	18
H 戦後の二重構造と中小企業の近代化	20
4 中小企業問題把握の視点	23
A 中小企業問題の「固有性」と「共通性」	23
B 構造変化と問題視点	24
〔参 考 文 献〕	29

2 国民経済と中小企業	31
1 中小企業の概念と範囲	31
A 質 的 規 定	31
B 量 的 規 定	33
2 国民経済における地位	36
A 日本の中小企業の量的比重	36
B 国 際 比 較	42
3 国民経済における機能	45
A 日本の中小企業	45
B 欧米の中小企業	54
〔参 考 文 献〕	58
 3 産業組織と中小企業	 61
1 産業組織と産業構造	61
A 産業組織の概念	61
B 産業構造の概念	63
2 寡占産業・市場と中小企業	65
A 集中・競争と中小企業	65
B 寡占産業と効率的規模	72
3 原子的産業・市場と中小企業	75
A 原子的産業・市場の特徴	75
B 過渡競争・「破滅的競争」	76
4 従属形態と中小企業	81
A 競争の変化と支配・従属関係	81
B 独占資本と下請制・企業系列	84
〔参 考 文 献〕	88

4 中小企業の経営と金融	91
——資本構成と収益性——	
1 資本の性格と経営管理	91
A 資本の性格と経営者	91
B 企業の形態	94
C 経営の組織と管理	95
2 財務状態と経営実績	103
A 資金の調達	103
B 経営実績	109
C 資本の蓄積	112
[参考文献]	113
 5 中小企業の労働問題	115
1 労働市場	115
A 中小企業労働市場の形成	115
B 中小企業労働者の量的・質的把握	117
C 労働力の需給	122
2 労働条件	127
A 賃金水準と賃金形態	127
B 労働時間と労働環境	133
C 最低賃金制と中小企業	135
3 労使関係	137
A 労務管理	137
B 労働組合と労使紛争	139
[参考文献]	142

6	地域産業と中小企業	143
	——産地企業の現状と問題点——	
1	産地企業の概念と主要特徴	144
A	産地企業の概念	144
B	産地企業の存立形態	147
2	産地企業の現状と動向	148
A	産地企業の分布状況と全工業に占める比率	148
B	産地企業の動向	151
3	産業構造の変化と産地企業をめぐる諸問題	155
A	産業構造の変化と産地企業の構造的変動	155
B	産地企業の当面の問題	158
	〔参 考 文 献〕	163
7	技術革新と中小企業	165
1	技術革新と中小企業の立場	165
A	技術革新のにない手	165
B	わが国における技術革新	168
2	技術革新の経済的影響	172
A	外部条件の変化としての技術革新	172
B	新製品の出現と中小企業	174
C	新生産方法の採用と中小企業	176
3	中小企業の技術革新	178
A	技術水準の向上	178
B	革新主体としての中小企業	181
	〔参 考 文 献〕	185

8 流通革新と中小企業187

- 1 流通革新とその背景187
 - A 流通革新の意味するもの187
 - B 商業組織の特性190
- 2 中小商業の存立形態192
 - A 中小商業の比重と零細性192
 - B 中小商業問題の発生と展開197
- 3 流通機構の再編200
 - A 卸 売 部 門201
 - B 小 売 部 門204
- 4 流通近代化政策の周辺208
 - A 「近代化」のねらい208
 - B 中小商業の問題点213

〔参 考 文 献〕216

9 産業再編成と中小企業217

- 1 中小企業をとりまく環境の変化217
 - A 高度成長と重化学工業化の進展217
 - B 成長のどん化と開放体制への移行218
 - C 高度加工型産業への転換と寡占体制の強化220
- 2 中小企業の地位の変化222
 - A 存立分野の変動223
 - B 中小企業の規模移動225
 - C 零細企業の増大と新型零細企業227
 - D 業種転換の増大230

3 中小企業の立地変動	232
——大都市における中小企業を中心として——	
A 都市化の進展と中小企業	232
B 中小企業の移転分散の動向	233
C 大都市における中小企業の在立基盤	235
4 中小企業再編成の方向と発展形態	237
A 再編成の方向	237
B 発展形態	241
【参考文献】	245
10 中小企業の組織化・協業化	247
1 中小企業組織化の意義	247
A 組織化のねらい	247
B 組織化の形態・機能	248
2 中小企業組織化の歴史	249
A 戦前の組織制度	249
B 戦後における組織化の展開	251
3 産業体制と中小企業の組織化・協業化	254
A 企業系列再編と下請中小企業の組織化	254
B 安定化と調整の組織化	257
C 構造改善と協業化	259
【参考文献】	265
11 地域開発と中小企業	267
1 中小企業の立地条件の変化	267
A 工業の立地因子と立地条件	267

B	中小企業地域集団の立地条件の変化	269
2	工業団地・共同工場	274
A	工業団地の歴史と定義	274
B	わが国の工業団地の現状	276
C	わが国の共同工場の現状	281
3	卸商業団地	284
A	流通革新と中小商業の立地条件の変化	284
B	都市類型と卸商業の立地移動	285
C	卸商業団地の現状	287
4	中小企業集団化の意義と問題点	289
	【参 考 文 献】	290
12	中小企業政策の展開と課題	293
	——新しい中小企業政策の在り方を求めて——	
1	70年代への展望	293
A	環境変化の評価	293
B	規模経済のメリットと中小企業分野	295
2	政策の展開とその反省	298
A	過去における展開と政策の体系	298
B	構造高度化と構造改善	301
C	構造改善政策の問題点	306
3	新しい政策の方向づけ	309
A	政策の基調をどこにおくか	309
B	適応政策への条件整備	314
	【参 考 文 献】	321
索 引		323

1 資本主義の発展と中小企業

1 資本主義と中小企業問題

A 中小企業問題の把握のために

現代の複雑な中小企業問題を取り上げる場合、まず第1に、中小企業とは何かという点について考察しておくことが必要であるかも知れない。しかし、そのために今かりに1963(昭和38)年の中小企業基本法における量的規定、例えば「資本金5,000万円又は従業員300人以下の工鉱業」とか、あるいは「資本金1,000万円又は従業員50人以下の商業、サービス業」といったようなものを挙げて見たところで、それは結局中小企業とは何かを知るための1つの手がかりを提供するものにすぎないのであって、それ以上に中小企業のもつ問題性を規定し得るものではない。というのは、中小企業の問題は、本来すぐれて歴史的に規定されたものであって、その原型としての小工業が産業革命における工業化の過程において、近代的大工業との関連から初めてその存在を認識されて以来の歴史を背負うものであるからである。

すなわちそれを歴史的発展過程からみれば、従来のマニファクチュアにおいては、「その技術的基礎の狭隘性のために、小資本に対する大資本の優位はまだ決定的ではなかった」のであるが、機械制工業のもとでは「彼らの小資本が大工業の経営に十分でなく、いっそう大きな資本家との競争

にやぶれるために、あるいは彼らの熟練が新しい生産様式によって価値をうしなうために」大資本の小資本に対する優位は決定的となり、これまでの「中間層の下部、すなわち、小工業、小商人、小金利生活者、手工業者と農民、すべてこれらの階級ははだいにプロレタリアートに転落する」と述べられたような過程を経ることとなり、その後における自由競争から独占への発展のなかにおいては、大資本が中小資本を圧倒し没落させつつ集中してゆく資本主義構造それ自体のなかでの中小企業の問題を意味することとなったからである。

およそそのような前提の下に、この中小企業がその成立以来今日に至る過程において、各国の資本主義の中で、また特にわが国資本主義の中で、更には国際関係の中で如何なる問題を持ったのか、また現在持ちつつあるのかを究明し、従ってこの間にしめる中小企業の位置と役割とを、どのようなものとして理解するかが第1章の課題である。

叙述の順序としては、まず前半の1, 2節で資本主義全般の中での中小企業問題の展開を経論的に略説し、後半の3, 4節では日本資本主義内部における問題の展開をやや詳論し、あわせて最近の国際面への問題の展開についても言及することにしたい。

B 中小企業の問題性と資本主義の「矛盾」

▶ 中小企業の歴史的展開

中小企業の「問題」が、資本主義の展開過程で必然的に生じた産業構造上の1つの「矛盾」として把握されるならば、中小企業問題の展開は、資本主義発展の諸段階、典型的には、資本の本源蓄積の段階、産業資本の確立とそれ以後のいわゆる自由競争的「産業資本主義」の段階、さらには独占資本の成立から今日の国家独占資本主義の段階のそれぞれに照応した、資本主義自体の「矛盾」の展開過程のなかでとらえられるべきであろう。

つまりこの「矛盾」は、資本主義発展のそれぞれの段階において、優位かつ支配的な資本が、より劣位の資本をどのように組織し、かつ支配していくかという資本の運動法則の一側面の問題として見ることができる。この場合、それぞれの発展段階において生み出される「問題」の内容が変わったり、従ってまた「問題」の担い手の性格や範囲が違ってくるといった、不定性・雑多性を示すことがあったとしても、それはまさに史的に発展する外見的な様相であり、資本主義の発展過程に照応した「矛盾」のあらわれとしての「問題」の本質には変わりはない。

そこで次節では、資本主義の発展段階に照応する典型的な「矛盾」・「問題」の系譜として、産業資本主義段階における「小工業問題」、独占資本主義段階での「中小企業問題」を、中小企業の歴史的展開という視点から概説しておきたい。

2 資本主義の発展と中小企業問題の展開

A 産業資本主義段階と「小工業問題」

いわゆる「産業革命」を通じて、機械制大工業が出現し、これを基盤として産業資本が確立されていくわけであるが、この段階に至っても、手工業やマニユファクチュア等の遅れた生産形態は、依然として広範囲に残存しているわけである。

▶ 「産業革命」と「小工業問題」の発生

しかし全面的な機械体系の採用による大工業化の原則は、これらの遅れた生産形態の領域へも次々に浸透し、原則的には手工業をマニユファクチュアへ、マニユファクチュアを機械制(大)工業へと転進させて行く。

と同時に大工業から時にはき出される失業者や、農村への資本主義の浸

透によって生み出されてくる潜在的失業者の如き、資本制蓄積にともなう相対的過剰人口の群は、近代的マニュファクチュアや、近代的家内労働などの遅れた生産形態の部門へ、その避難所を求めて殺到することとなり、とりわけ後者においては不規則就業の半失業者が著しく停滞することの結果、婦人・少年労働のチープ・レーバーと過度労働とに特徴づけられた「^{さんく ほうおく}惨苦の茅屋」がつくり出される。かくて、従来の「牧歌的」な家内工業は、一変して工場・マニュファクチュア場あるいは問屋の外業部に転化されるとともに、そこでの労働者間の競争は必然的にその最大限に達することとなる。

▶「小工業」問題の展開

しかもこれらの職場に、相対的過剰人口の増大とチープ・レーバーの存続する限り、これらの生産形態はその存立の基盤を失なうことなく、たとえ一方で、「工場法」等の社会立法がここに導入されることがあっても、このような社会立法自体はそれはそれなりの一定の役割を果たしながらも実質的には形骸化されることにより、半失業者のプールとしてのこれらの職場は、単に存続するというだけでなく、不断に再生産されるのであり、しかもそれは、在来部門のみならず、新生部門においても絶えず繰りかえされる。

他方、資本の集積・集中の結果としての大資本は生産規模に依存して労働の生産性をたかめ、商品の低廉化によって、小資本との競争にうちかつようになる。

このようにして資本制生産様式のいっそうの発展は、「事業を標準的諸条件のもとで営むに必要な個別的資本の最低分量」を必然的に増大させるので、小資本は、大資本によってはまだ散在的にかまたは不完全にしか征服されていない生産部門に殺到せざるを得なくなり、その競争は「敵対する小資本の数に正比例して激化する。」こととなる。こうした部門では、いっそうの低賃金と長時間労働その他の劣悪労働条件が固定化しつつ、多